

## はじめに

国際的な競争の中で存在感を示す魅力と活力あふれる都市をつくるのが、日本の都市・地域に求められている。各地域は、自らが持つ歴史・文化・景観を再認識し、行政・経済界・市民の知恵をフル活用して魅力あふれる都市づくりに取り組まなければならない。

21世紀は人間中心の都市づくり、すなわち生活の豊かさや知の集積を重視した取り組みが求められている。そのことが、国内・世界から投資を誘引し、観光客・ビジター等交流人口を増やすとともに、地価の下落等で進みつつある都心定住人口の増加を促進する。

関西圏の中核となるべき大阪の再生には、シンボリックな顔づくりと、継続的・長期的な取り組みが必要である。大阪は交通・産業・土地利用等多くの面で水と深く関わってきた。「水都・大阪」創生は、大阪の歴史・文化・アイデンティティそして産業を継承・再評価するものである。そして、時代の新しい潮流をつくる未来に向けた創造的な取り組みである。

2001年12月に「水都・大阪」再生プランが、国の都市再生プロジェクトとして認められた。これまでも、関西経済同友会は、「水都・大阪」創生を行政・経済界・市民が一体となり継続的・長期的に取り組む重要テーマと位置づけてきており、2002年5月には「水都・大阪」委員会を発足させた。

また、2002年9月30日には、水都の魅力を最大限に活かし、花・緑・光にあふれるまちづくりを進め大阪・関西を活性化することを目的に「花と緑・光と水 懇話会」が発足した。本会の取り組みの熱意が実ったものであり、メンバーとして積極的に参画しているところである。「懇話会」以外にも、行政・経済界・NPO・市民等による様々な取り組みが検討・実施されている。

「水都・大阪」創生に向けて、機はまさに熟している。

## 「1500年都市 大阪」

日本最古の都市大阪は浪速、攝津、河内、和泉等の名称が今も伝わっているように水の都であったことを示している。

5世紀前半この地に高津宮をおいた仁徳天皇は、大川を堀削し内陸部に溜まっていた内海の水を大阪湾に流すことに成功したと伝えられている。このことにより上町台地の東側に広大な土地が開け生産力が向上して古代河内王朝が栄えることになった。大川堀削はいわば公共工事の第一号であり、大阪の都市形成の原点だったといえる。以来1500有余年大阪の都市づくりは水路開削と干拓によって行われてきた歴史を持つ。言い換えれば、大阪は日本最古の水の都であり「1500年都市」なのである。

### < 「1500年都市」の骨格づくり >

古代政治都市から始まり、宗教都市、経済都市等の変遷を経て今日に至る大阪には、自ずと都市の骨格が形成されてきた。

この基本骨格を確認し1500年都市にふさわしい風格を整備することが、迎賓都市をめざす大阪にとって今まさに必要である。

### [顔]

大阪の「顔」に当たるところといえば、やはり梅田周辺であろう。

ところが、現代都市の動脈拠点である鉄道駅が新大阪駅と大阪駅に分離されてしまったため、在来線のターミナルである大阪駅の周辺は甚だ迫力を欠くことになり、大阪駅前南側は復興途上都市の様相でさえある。

大阪駅北側の貨物ヤード開発計画を推進すると共に、駅の北側と南側を一体的な回廊とし、水の都の玄関にふさわしい知的な大阪の「顔」としての整備に取り組む必要がある。

さらに「口・喉元」に当たる北新地や堂島は大阪の歴史にとって欠くことの出来ない物語性に充ちた場所であり、格段の称揚が必要である。

## [ハート・オブ・オーサカ]

大阪の心臓部は、中之島を含む大川沿いの一帯や大阪城周辺であろう。ここはいわば「ハート・オブ・オーサカ」と呼ぶべき地域であり、この中心地域を、世界に誇りうるユニークな都市美をもつ空間として整備することが必要である。

中之島を心臓部とし、左右に大川・安治川沿いに大きく両手を広げた骨格をイメージしてみたい。

## [背骨をなす御堂筋]

御堂筋を世界有数の大通りとして整備することにより、単に北から南へ車が通行するだけの大通りから、大都市の骨格を支える「背骨」としての魅力と風格ある通りへと脱皮させる必要がある。キタから「ハート・オブ・オーサカ」を通り長堀から千日前へとミナミのエンタティメントゾーンにつながる多彩で文化的な大通りが誕生する筈である。

## [循環系としての水]

「1500年都市」の骨格をつなぐ「循環系」は都市面積の10%を占める水面であり、水面や水辺の活用、水に親しむライフスタイルの創造が求められる。

今から300年前「天下の貨7分は浪華にあり 浪華の貨7分は舟中にあり」と言われた。日本の富の約5割は大阪の舟の上にあったのである。

かつて経済的繁栄をもたらした水路は、物資が陸送に移るにつれ、埋めたてられ踏みつけられ背を向けられてしまった。ところが、水の多くを失って、我々は水の有難さをようやく認識させられつつある。

風格のある「1500年都市」に水の要素がどれ程大切であるか。単に賑わいをつくるという次元を超えて、川を渡る風、川辺にそよぐ緑、橋の上から見える遠景、空の雲や夕映え、川面に飛び交う鳥の姿、水から跳ねる魚の影。それらの一つ一つが都市格にとってかけがえのない資産である事によりようやく気づかされたのである。

関西経済同友会「水都・大阪」委員会はここに「1500年都市大阪」にふさわしい風格ある街の骨格づくりを、ソフト面、ハード面を相互に関連させつつ、中長期目標と短期目標をあわせともに提言するものである。